

地域と協同の

2016年11月25日発行

147号

研究センターNEWS

巻頭エッセイ

「Well - Being(福祉)社会」への期待

野原 敏雄氏 (中京大学名誉教授・地域と協同の研究センター顧問)

第1回「東海フォーラム」の開会挨拶で、当時研究センター長だった私は、このフォーラムが「研究センター」の看板事業になると話した記憶が、今もあるが、すでに10年以上の年月が過ぎた。今、名称も「東海交流フォーラム」と変わり、参加者の経験や願いを語り合い、結びつきを強め広める実績を重ね、期待どおり、否それ以上となった。今年6月の「増刊ニュース 地域と協同 第5号」を見ての感想である。ページを繰りながら、目指しているのは、「Well-Being(福祉)社会」だと思った。

それは、今普通に理解されがちな「Welfare(福祉)社会」とは違う社会である。「健康な人が弱者を援ける」福祉社会ではなく、「みんながよりよく生きることを目指す社会」である。だれも一終末期の病人も、それを介護する人も、その人その人の希望をもっている。それを実現し、充足させる社会である。もっと普通に言えば、「食と医療・介護」の2つがキチンとできる社会であろう。今後もそれを目指すフォーラムであって欲しい。でも、急がないでだが、もう一段のレベル・アップを欲張りたい。

日本の生協組織は、名称で「生活」を冠した世界唯一の協同組合である。これまでの関係者の努力で、揺らぎつつも、「食と健康・医療と平和文化」を目指す協同組合の内実、まさにWell Being 社会を目指してきた。それを確信し、「日本生協組織」が中心軸となってそれを国全体に広げるような先駆的な方向性と仕組みづくりを、見せてほしい。研究センターのフォーラムはそのパイロットとなって欲しい。

CONTENTS

【巻頭エッセイ】	1
「Well - Being(福祉)社会」への期待 野原 敏雄氏	
【岐阜地域懇談会活動報告】	2
…NPO法人「ひなたぼっこ」を見学…	
【第30回ものづくりの思いを語る会】	3
酢づくりは酒づくりから	
【日本協同組合学会第30回大会報告】	4
現代社会における協同組合のあり方を問う	
◆情報クリップ	5
◆企画・書籍紹介	8

研究センター 11月の活動

11月4日(金)岐阜地域懇談会「ひなたぼっこ」訪問
11月5日(土)共同購入マイスター⑤
11月7日(月)国際協同組合デー記念行事準備会、ものづくりの思いを語る会「内堀醸造(株)訪問」①
11月8日(火)ものづくりの思いを語る会「内堀醸造(株)訪問」②
11月9日(水)事務局会議、協同組合間協同打合せ「医療・介護・福祉分野」相談会
11月11日(金)くらしを語りあう会 11月15日(火)研究フォーラム職員
11月17日(木)NEWS編集委員会
11月19日(土)、23(水)政策提言チーム会合
11月25日(金)協同の未来塾10th
11月26日(土)生協の(未来の)あり方研究会
11月28日(月)尾張地域懇談会・世話人会

— 【岐阜地域懇談会活動報告】 —

ゆったりとのんびりと、あったかサービス

NPO法人「ひなたぼっこ」を見学しました

— 報告：岐阜地域懇談会世話人・熊崎辰広氏 —

岐阜世話人会では、11月5日中津川市蛭川にあるNPO法人の「ひなたぼっこ」を見学しました。参加者は12名。

1995年に当地に移り住んだ斎藤さんと住民有志との話し合いの中から、古民家を改修しての宅老所「ひなたぼっこ」がつけられました。その後16年が経過し、現在では最初の古民家の近くに新しい建物が完成、ここが事務局のある「ひなたぼっこ」で、通所介護、障がい者の居宅介護、障がい者重度訪問介護、障がい者の地域生活支援などの事業と「くらし助け合いの会」の活動の拠点となっています。当日はこの施設の見学と、車で5分ほどのところにあるグループホーム「そよかぜ」を見学しました。ここでは障



がい者自立支援居室が併設されています。実際に24時間介護が必要な方も入居されていました。この二つの施設で働く職員は48人で、障がい者の方も2割ほどとなっています。ここで働く人の給与は、障がい者の方も差別なく同じ給与となっています。さらに給与の額も職員が話し合っ決めていくということでした。毎月の経営数値は共有され、いわば一人ひとりが経営者の立場で働ける職場であり、それが働きがいにつながり、やめていく人はいないということでした。初めから決められたことでなく、自ずからそうなった、という感じで、民主主義とか同一労働同一賃金とかを意識していたのではないということでした。

もう一つ、この法人の特徴は、通所の介護の場合1日10人以上にはしない、小規模性を維持するという事です。増やすことは可能でも、それ以上になると、高齢者を商品扱いにし、また職員にも過重労働に繋がるような質の低下につながる、ということです。施設を見学した印象では、木の香りのするゆったりとした空間に、大切にされている高齢者のいる明るい空間という印象でした。もちろん、その小規模性ゆえの経営の困難さがあり、



また介護保険などの制度との関係でも、つねに妥協することなく創意工夫で運営をすすめている、ということでした。しかし、需要に応えるためには、同じような規模の法人をつくり、それをネットワークでつなぐということで、実際に中津川福祉医療ネットワークが斎藤さんも中心になり作られています。当日は、そのネットワークの一つで、小規模多機能施設「こまんば」を見学しました。隣接する古瀬医院が中心となり訪問看護、訪問リハビリなどケアの核となっていますが、ここでは訪問診療が可能なあたらしい医師の確保の見通しがあり、斎藤さんの願いが実現されるということでした。今後の推移を見守っていきたいと思います。

以上

第30回 ものづくりの思いを語る会 ～原点に学ぶ～ 酢づくりは酒づくりから 伝統的手法から新しいものへ



文責：伊藤小友美

第30回「ものづくりの思いを語る会」を、11月7～8日、内堀醸造株式会社の本社工場とアルプス工場見学を兼ねて14名の参加で開催しました。ものづくりの思いを語る会が結成されたのは約15年前。研究センターのメンバーで、東海の生協と長いお付き合いをさせていただいているメーカー・生産者のみなさんと、研究センター・生協の役員等で、ものづくりへの思いを交流・学習し続けています。今回は、この会の原点とも言える思いを確かめるべく、内堀醸造の会長、内堀信吾氏（85歳）に八百津の本社工場でお話を伺いました。

めいきん生協の設立を報じる新聞記事を読んで、すぐに内堀さんご夫妻は生協を訪問されたそうです。創業の場である内堀さんの本宅（築130年）の座敷で、「本物の酢とは何か」ということを、組合員も一緒に3時間も4時間も議論することが半年くらい続いたとのこと。「勉強して勉強して、それで取引が始まった。」と四十余年前を振り返り懐かしそうにお話いただいた内容を、以下にご紹介します。



内堀会長本宅の座敷にて

50年近く関わってきた経験、勉強すること、人が出会う不思議さ、本当に言い表しようのない出会いの不思議さをお話したいと思います。

その人たちがどこに暮らしているか、これがとても大きな問題だと思っています。工場に来ていただいたことに、今日の勉強会の価値をくみ取っていただけたらいいと思います。

食品は、風土の影響を非常に受けます。ふつうは水、水質を言うが、空気の質が品質に影響を与えるのが大きいのではないかと、私はいつも思っています。

築130年の八百津の家が原点です。ここ（写真参照）で「内堀の酢は本物か」と組合員に言われました。歴史を重ね、庭の石も苔むしてきました。

技術革新は、「病気をなくしたい」という思いから始まりました。木の桶からステンレスへ変えるとき、かなり議論を重ねました。病気がない、健全な発酵のためにしたことです。それ以後クレームはなくなりました。

意外と知られていないのが空気、酸素の存在です。微生物にとって、空気の存在は非常に大切です。

こういう考え方で、ものづくり、酢づくりの技術力をあげる努力をすることが大切だと考えています。今も昔もこれからも変わらず、勉強する目的はこういう考え方

がよいのではないかと考えています。生協という組織をつくられた田辺準也さん（現研究センター理事）とお会いできたことは非常に大きな転換点でした。生協に長く関わったことに感謝しています。

生協というのは人間学の研究団体ではないかと思っています。本質、本物は案外自分たちの足下にあると思います。何が正しいか今もわかっていませんが、発酵の純粋性とからみあわせて、昔の人たちがどんなつくりかたをしていたか、古きをたずねる伝統的手法から新しいものが生まれるのではないかと思います。頼りにするものがないときほど、伝統の重さを考えた方がいい。そうはいっても、ものづくりは人間がやっていることです。ものづくりをしようと思うと、どうしても、社員の人格向上をめざさないとはいけません。

この「ものづくりの思いを語る会」の根幹に関わるのが人、人づくりが基ではないかと思っています。

生協が扱っているものは安全で安心、信頼性の高い商品だと組合員は思っています。その商品に関わるものづくりの責任は、私たちメーカーが協同的に連帯的に思うことではないかと思っています。誇りを持って、研鑽を続けていくといいと思います。組合員の期待を背負っている責任があることを常に頭に置きつつ。

この後、メンバーの熱い交流は続きました。八百津では新社屋が建設中で、その中の研究室に内堀会長のデスクも置かれるそうです。「毎日が勉強」とおっしゃる会長の深く熱い思いに触れ、一同思いを新たにしました。社長の泰作氏（信吾氏のご長男）、社長室の文裕氏（泰作氏のご長男）にもご同席いただき、たいへん意義深い会となりました。アルプス工場では、工場長の杉江毅さんに詳しくご案内いただきました。アルプス工場は、大きなロットのものを製造し、経理や研究開発は八百津の本社工場で行っているとのこと「醸造部門なので、工場の中へ入り、『酢づくりは酒づくり』を香りで体験してほしい。この伊那谷でできるものづくりを大切にしている。」とのお言葉が印象的でした。どちらの工場でも、仕事のみなさんが足をとめて、丁寧に笑顔でご挨拶をしてくださりました。紙面をお借りして、内堀醸造のみなさまにあらためてお礼申し上げます。ものづくりの現場に学ぶことの大切さを実感できた2日間でした。

*** 日本協同組合学会第30回大会報告 ****

現代社会における協同組合のあり方を問う

日本協同組合学会第30回大会

***** 橋本吉広氏（日本協同組合学会員・地域と協同の研究センター理事） **

2016年10月7～9日、札幌の北大農学部を中心に日本協同組合学会第30回大会が開催されました。1986年9月に「協同組合の規模と連合機能」を大会テーマとした第6回大会以来、北大農学部で開催されるのは30年ぶりのこと。イチョウ並木が色づくには少し早い時期でしたが、コープ・アイランドともいわれる北海道の地で開催された大会に前回に引き続いて参加できたことが感慨深く、時の過ぎる早さを改めて感じさせられました。

農協改革、TPPと揺れる情勢のもとで、今年の大会テーマは「これでいいのか協同組合～その主体性を問う」という内省的な問いかけを含むものでした。

大会全体では、初日7日に地域シンポジウム「北海道農業の形と農協の役割」が議論され、今年は台風の襲来を何度も経験し、深刻な打撃を受けて未だ復旧の確たる歩みが踏み出せないなか、日本の食料基地＝北海道・JAきたみらいでの「出向く営農体制」の追求など農協の組織力形成の取り組みをはじめ、農協女性部、農協青年部の粘り強い活動ぶりが印象的な議論となりました。2日目8日の午前中は6つの会場でテーマ別分科会が開かれ、協同組合実践が直面する問題を中心に精力的な報告と意見交換が行われました。私が参加し、個別報告もした女性や子ども、若者の貧困に向き合う協同組合について議論した第6分科会については、本稿後段でやや詳しく言及することにします。

8日午後には、前述の「これでいいのか協同組合～その主体性を問う」をテーマとする大会シンポジウムが行われ、まず学会長の石田正昭氏(龍谷大学)による座長解題を受け、1)農協法改正が提起する課題、2)北海道における協同組合の存在意義の各報告に対するコメントをめぐる議論から始まり、会場からの発言も含めて多角的な意見が交わされました。ただ、今回の農協法改正における協同組合自治への政治の乱暴な介入に対し、その評価において極めて政治的な言及もあり、TPPを推進する安倍政権と正面から対決せず、妥協点を模索する農協(中央会)の現状や、官邸主導の農協改革でどこまで攻め込まれ、どこまで押し戻したかの評価も当事者視点の曖昧さもあり、会長解題が正面から問うた現代協同組合の基本問題を深める論議としては物足りなさを私は感じました。

さて、第6分科会は、①昨年、戦争法反対・立憲主義擁護の一大市民政治運動を経験し、生協の組合員活動から代理人運動を経て、いま生協活動が「政治活動」への回路としてどのような役割を果たし得るのかにつき、ワーカーズコレクティブ運動の到達点も踏まえ問い返す報告、②生活困窮家庭の子ども支援に取り組む医療生協・労働協の実践を踏まえ、産業組合も神戸生協も貧困に取り組むなかから生まれた歴史を想起するなら、今日の協同組合運動は「貧困」にあまりに向き合い切れていないとの現状認識に立ち、子ども支援の一環である学習支援活動も、経済的な事情から塾に通えない子どもを支援し高校合格を実現するという塾の補完に留まらない「居場所」づくりに繋がる事例を取り上げ、子どもたちの学校生活の現実や将来展望を共に拓く実践の必要性(教育協同組合や子ども協同組合の必然性)を問う(筆者)、③日本協同組合学会女性部会からの子育て・子育てにおいて現代社会が抱える社会的困難と現状の生協活動のあり方を問う報告など行われました。既存の協同組合のメインストリームにはなり得ていないものの、現代社会の現実を見渡せば、協同組合こそがこれら問題解決の道を切り拓く使命をもつべきではないのかという点では、通底し合う提起に思われ、今後、実践でも研究でも取り組みの進展が期待される分野だと感じました。

最終日9日は、台風禍の影響で当初の計画を変更し、夕張郡の地域振興と千歳近郊の女性起業とそば専門農協の事例を現地で学びました。本大会の詳細は学会誌の次々号に掲載される予定です。

以上

情報 クリップ



メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 判型 定価/頒価
<p>▶多様な働き方で生き生きと活躍できる職場づくり</p> <hr/> <p>NAVI 2016. 11 No. 776</p> <p>日本生活協同組合連合会</p>	<p>特集 多様な働き方で生き生きと活躍できる職場づくり <コープのある風景> こうち生協 <こんにちは！生協男子ですっ！> 生協しまね 湯原拓也さん <元気な店舗の取り組みを学ぶ> ララコープ LaLa 富の原 <宅配・現場レポート> 日本生協連 <生協大好きママ コプ山さんの 教えて！CO・OP 商品> CO・OP フリーリアシリーズ <つながろう CO・OP アクション情報> 福島県生協連 <想いをかたちにコープ商品> CO・OP 北海道のそのまま枝豆 <今月の コープで笑顔がキラリ> 生協コープかごしま <エッセイ> 東京⇄パース 小島慶子の8,000キロ通信 空からひとりごと <日本全国ふだんのくらしを支えたい> 岡山医療生協 <明日のくらし ささえあう CO・OP 共済> コープおきなわ <この人に聴きたい> 作家 宮下奈都さん <ほっと n a v i > パルシステムグループ 株式会社地球クラブ</p>	<p>2016 年 11 月 A4 版 36 頁 360 円</p>
<p>▶地域自給で生きる 一格差・貧困から抜け出す途(みち)</p> <hr/> <p>社会運動 2016. 10 No. 424</p> <p>市民セクター政策機構</p>	<p>特集①地域自給で生きる一格差・貧困から抜け出す途 (みち) ① 自給ネットワークを実現する経済学 「FEC 自給ネットワーク」がなぜ必要なのか? 編集部 FOR READERS 「地方再生をめざすオルタナティブな経済学、そして現実 「所得1%取り戻し戦略」で地方人口を安定化させる 島根県中山間地域研究センター研究統括監 藤山 浩</p> <p>② 地域自給・循環型経済が拓く未来 CASE STUDY 01 山形県庄内地方 「共生経済」を地域で回す! 庄内FEC自給ネットワーク CASE STUDY 02 愛媛県南予地方 「百姓の理想郷」をつくる 地域協同組合無茶々園 CASE STUDY 03 東京都練馬区 都市農業でコミュニティ再生 白石農園 CASE STUDY 04 東京都墨田区 廃食油の回収から地域発電へ TOKYO 油田プロジェクト CASE STUDY 05 山形県置賜地方 「生産基地」を再興するために 置賜自給圏構想</p> <p>特集②もう一つの平和論 憲法九条の「限界」を考える 南スーダン PKO の矛盾と沖縄問題の解決に向けて 東京外国語大学教授 伊勢崎 賢治</p> <p>個人の尊厳が平和の原点 憲法13条と24条をめぐって 同志社大学大学院教授 岡野 八代</p> <p>新たな遺伝子操作技術「ゲノム編集」の問題点 北海道大学教授 石井 哲也</p> <p>悼みの列島 日本を語り伝える 相模湖の水底で何が起こったのか ライター 室田 元美 おしどりマコの知りがりの日々・レッツ想定外! 第4回 福島の農家の怒りの声をとどろかそう! 芸人・記者 おしどりマコ</p>	<p>2016 年 10 月 A5 版 170 頁 1,000 円(税別)</p>

メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 半期 定価/頒価
<p>▶JA グループの 担い手育成支援</p> <p>~~~~~</p> <p>月刊 J A</p> <p>2016. 11 vol. 741</p> <p>全国農業協同組合中央会</p>	<p>特集 JA グループの担い手育成支援 JA における担い手育成・支援の取り組み</p> <p>JA 全中営農・経営戦略支援部</p> <p>事例に学ぶ担い手育成支援① ～集落営農を中心とした担い手育成 JA グリーン近江</p> <p>事例に学ぶ担い手育成支援② ～JA 出資型法人を中心とした担い手育成 (有) ジェイエイファームみやざき中央</p> <p>日本農業賞の現場から ～田切農産、JA 上伊那の取り組み JA 全中広報部</p> <p>オピニオンリーダーに聞く</p> <p>西居 豊</p> <p>きずな春秋 ―協同のこころ― 泥田で泣いた家康の家臣団 童門冬二</p> <p>JA グループ共通コンテンツ</p> <p>JA トップインタビュー 都市型 JA としての存在価値を確立 榎本高一 (東京都 JA 東京あおば 代表理事組合長)</p> <p>展望 JA の進むべき道 内部統制整備構築の必要性 太田実 (JA 全中常務理事)</p> <p>海外だより [D.C.通信] 連載 66 アメリカ議会で影響力を発揮する「ロビイスト」 中村岳志</p> <p>平成27年度 JA 経営マスターコース優秀論文紹介 塾長賞 フェース・トゥ・フェースの活動が組合員の願いをつなぐ 佐々木雄基 / JA おちいまばり (愛媛県)</p>	<p>2016 年 11 月 A4版 48 頁 年間予約 5,109 円(送料+ 消費税)</p>
<p>▶幸福について考える</p> <p>~~~~~</p> <p>生活協同組合研究</p> <p>2016. 11 Vol. 490</p> <p>公益財団法人 生協総合研究所</p>	<p>■巻頭言 アジアの村から「幸福」を考える 赤石和則</p> <p>▶特集 幸福について考える 経済発展と人々の幸福度</p> <p>武田晴人</p> <p>幸福感研究と指標活用 内田由紀子</p> <p>現代の消費格差と今後の生協の課題 三浦 展</p> <p>セーフティ・ネットと私たちの幸せ 小塩隆士</p> <p>少子化社会におけるワーク・ライフ・バランスと幸福感 白石小百合</p> <p>生協で働く正規職員の仕事に対する満足と「嬉しさ」 山縣宏寿</p> <p>コラム1 生協に関わる「仕合せ」 ～実践で育まれる力 生協の役割はモノからコトへ～ 志波早苗</p> <p>コラム2 荒川区民総幸福度 ～幸福度を区政の中心に据えて～ 白水忠隆</p> <p>コラム3 3つの幸福論について 鈴木 岳</p> <p>■時々再録 ライフコーポレーション・清水信次会長の遺言 白水忠隆</p> <p>■海外情報 ICA アルメリア協同組合研究会議報告 鈴木 岳</p> <p>■本誌特集を読んで (2016・9) 倉貫浩一・本田英一</p> <p>■新刊紹介 読売新聞教育部 『大学入試改革』 眞田隆裕 樋口恵子 『サザエさんからいじわるばあさんへ』 鈴木 岳</p> <p>■研究所日誌</p> <p>●公開研究会 「地域ささえあいをどう形成するか」 東京11/24 大阪12/8</p>	<p>2016 年 11 月 68 頁 B5版 本体500円+ 税</p>

メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 半 定期分冊
<p>▶社会に求められている長期リハビリ</p> <hr/> <p>文化連情報 2016. 11 No. 464 日本文化厚生農業協同組合 連合会</p>	<p>農協組合長インタビュー (33) 安全・安心な日本の農産物を食べてもらいたい 前原 節雄</p> <p>今こそ協同活動を深める運動を 木内 健行</p> <p>院長リレーインタビュー (294) 社会に求められている長期リハビリ 泉 従道</p> <p>二木学長の医療時評 (143) 公正取引委員会の「混合介護の弾力化」提案の背景・意味と 実現(不)可能性を考えるー混合診療解禁論との異同にも触れながら 二木 立</p> <p>アメリカの医療制度 (2) 米国の医療政策の展開 高山 一夫</p> <p>もの忘れ散歩のできるまち ほんべつを目指して 飯山 明美</p> <p>韓国農業の実相ー日本との比較を通じて (3) 日韓の「むら」構造の相違 品川 優</p> <p>臨床心理メディエーション (6) 倫理をめぐる医と法 中西 淑美</p> <p>農村医学は世直し運動! ~ 私の歩んできた道 (20) 結果を出す! 小山 和作</p> <p>地域包括ケアと協同・地域づくり 第20回厚生連病院と単協をつなぐ医療・福祉研究会報告 古谷 桃子</p> <p>平鹿総合病院栄養科の取り組み (2) 糖尿病に関する取り組み 石山 香</p> <p>全国厚生連統一献立 栃木=じゃが芋入り焼きそば・こんにゃくの和風マリネ 石井 洋子</p> <p>第7回厚生連医療材料対策研究会/検査試薬対策研究会報告 小林 裕幸</p> <p>デンマーク&世界の地域居住 (90) オランダの革新①介護保険 AWBZ の大改革 松岡 洋子</p> <p>熱帯の自然誌 (8) ことば その一 安間 繁樹</p> <p>イギリスの社会的企業 女性のための社会的企業 アカウント3 (1) 小磯 明</p> <p>熊本ボランティアに参加しました 秋元 恵介</p> <p>デンマーク コペンハーゲン フェレルゴーン (3) フェレルゴーンの機能 小磯 明</p> <p>秋田県厚生連 インターンシップ/大曲厚生医療センター・緩和ケア病棟 川上 紗綾</p> <p>●野の風● ぼこちゃんとロンちゃん 増山恵美</p> <p>◆第4回厚生連診療情報管理士研究会開催のお知らせ ◆第4回厚生連医療メディエーター実践者スキルアップ研修会開催のお知らせ</p> <p>◇各地のニュース □映画紹介 「ここに居るさ」 高橋 章子</p> <p>▶線路は続く (104) 田んぼアートで輝く弘南鉄道 西出 健史</p> <p>▶最近見た映画 人間の値打ち 菅原 育子</p> <p>▶虹のかけ橋</p>	<p>2016 年 11 月 B5 版 88 頁 文化連情報 編集部 03-3370-2529 *注</p>

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(♣)などを中心に順不同で紹介しています(主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお気軽にお問い合わせください。

企画案内



風船が教えてくれた 岐阜・濃尾平野は被害地

**動かすな！40年超え老朽原発 美浜3号
さよなら原発パレード in 各務原**

福島原発事故の原因究明、自己処理、汚染水のめどもないまま、老朽原発まで再稼働させようとしています。
美浜原発は、運転期間40年超えの老朽原発で、3号機の運転期間延長が11月半ばに認可されそうです。すでに高浜原発は、40年廃炉の原則をやぶり、1、2号機が初の20年延長が認可されています。

期日：2016年12月11日（日） 集会10:30から パレード11:30から

場所：各務原市民公園（名鉄各務原線市民公園下車、図書館の東へ集合）

内容：「福井県・水晶浜からの風向き調査プロジェクト報告」

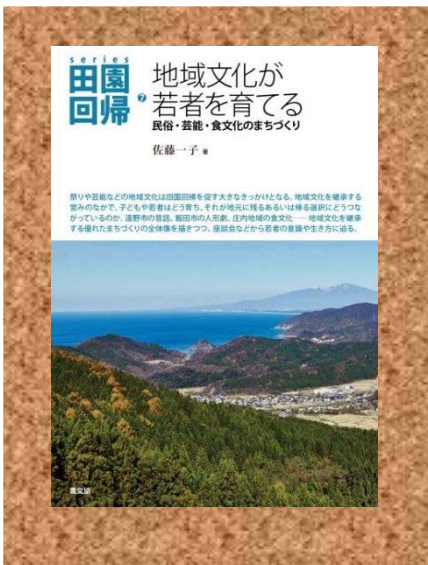
2012年3月3日に行われた風船による風向き調査の報告です

調査の結果、福井の原発に事故があれば、今回の風向きの条件では、岐阜県の人口密集地に甚大な放射能物質による汚染が起こること、さらに名古屋市を含む濃尾平野全体に汚染が広がることが明らかになりました

主催：さよなら原発各務原 さよなら原発ぎふ

問い合わせ：岐阜県平和委員会（058-242-9701）

書籍案内



シリーズ田園回帰7 地域文化が若者を育てる
民俗・芸能・食文化のまちづくり
著者：佐藤一子 定価：2,376円（税込）発行日2016/10
出版農山漁村文化協会（農文協）判型/頁数A5 228 ページ

祭りや行事といった地域文化は田園回帰を促すきっかけや大きな要因となる。
その地域文化を引き継ぐ営みのなかで、担い手はどう育ち、それが地元に残る選択にどうつながっているのか。岩手県遠野市の昔話と創作ファンタジー、長野県飯田市の人形浄瑠璃と現代人形劇、山形県庄内地方の食文化——地方文化継承・創造の3事例の全体像を描くとともに、座談会やインタビューをとおして担い手である若者やU・Iターン者の生き方に迫る。
農山漁村文化協会ホームページより

2016年11月25日発行（毎月25日発行）
定価200円
（税・送料込み。年会費には購読料が含まれています）
発行 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター
代表理事 西川幸城
〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39
TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315
E-mail AEL03416@nifty.com
HP <http://www.tiiki-kyodo.net/>

研究センター 12月の活動予定
12月1日(木)研究フォーラム環境「オオブユニティ見学」, 名市大寄付講義ふりかえり・相談会
12月2日(金)常任理事会
12月6日(火)研究フォーラム食と農・世話人会
12月8日(木)組合員理事ゼミナール③
12月10日(土)東海交流フォーラム実行委員会, 政策提言第3回公開学習会, 理事会
12月14日(水)三重地域懇談会・世話人会
12月15日(木)三河地域懇談会・世話人会
12月16日(金)岐阜地域懇談会・世話人会
12月22日(木)常任理事会, NEWS編集委員会
12月24日(土)政策提言チーム会合